

## 肌感 hadakan 2月25日（月）：シネ・ヌーヴォ支配人 山崎紀子

下町アートシアター“シネ・ヌーヴォ” ～舞台裏見学と九条下町ぶらり飲み～

[トップ](#) >> [創造人を肌で感じるツアー](#) ～肌感 hada kan～ >> [下町アートシアター“シネ・ヌーヴォ”](#) ～舞台裏見学と九条下町ぶらり飲み～



### ツアーレポート

2月25日（月）に催された山崎紀子さんのツアーの様子をご紹介します。

※画像はクリックすると拡大します

[山崎紀子さんのプロフィールとツアー概要はこちら](#)

### 映画を愛する有志の出資で生まれた映画館

地下鉄九条駅からナインモール商店街を經由してジグザグと西へ4～5分。下町の裏通りにあるミニシアター「シネ・ヌーヴォ」さんに到着です。鋼のバラに縁どられた煉瓦壁のエントランスが異彩を放っています。一行はしばしその外観を眺めてから、ぞろぞろと館内へ。今回の創造人・支配人の山崎紀子さんが、やわらかな笑顔で出迎えてくださいました。まずはロビーでシネ・ヌーヴォの歴史を伺います。



九条駅から商店街を抜けて



シネ・ヌーヴォに到着



山崎紀子さんに迎えられて

代表の景山氏は13年間にわたって映画新聞を発行しながら、東欧の映画や、ドキュメンタリーの自主上映会などを主催していた方だそうです。様々な映画を紹介していくうちに、「いっそ映画館を作ろう」と映画新聞の読者に1口10万円の出資を呼びかけたところ、あっという間に多数の協力者が集まり、できたのがシネ・ヌーヴォ。玄関脇に掲げられたプレートに、出資者の名前がずらりと刻まれています。誕生の経緯を伺っただけでも、映画ファンの思いが詰まった特別な館であることがわかります。1997年にオープンして今年で16年目。この場所はシネ・ヌーヴォの前も代々映画館だったそうで、ヌーヴォは4代目にあたるとか。



出資者の名前を刻んだプレート



ロビーでお話

## 通路の壁いっぱい監督や俳優のサインが

映画ファンのみならず、映画関係者にも愛されているシネ・ヌーヴォ。館内の通路の壁をびっしりと埋め尽くす、監督や出演者の直筆サインもその証です。

桃井かおりさんは出演したウクライナ映画の上演に際して、監督とともに前ぶれなくふらりと現れたそう。事務所につながる階段からひょいと顔を出して、「ねえ、灰皿な〜い？」と声をかけられたという山崎さん。「その感じが、桃井かおりのイメージそのまま、かっこよかった〜！」以前上映したドキュメンタリー映画に出演していた山本太郎さんは、とある集会で偶然見かけて声をかけ、舞台挨拶に来てほしいとお願いしたら、本当に来てくれたそう。「すごく賢くて素敵な人！ファンになった〜」と絶賛です。



壁一面にサインが



壁一面にサインが



山崎紀子さん



「EDEN」に出演しているノリピーさんが舞台挨拶のため来館中

2006年に併設した「シネ・ヌーヴォX」は、客席わずか24席。もとは会議室という名目でイベント上映などをしていた場所だそうです。消防法にそって席数を減らし、通路を確保し、正式に映画館として認可されたとか。「改装にお金をかけられないので、椅子の脚をのこざりて切って段々状に座席を作ったり、文字通り手づくりの映画館。それまでは渋谷のアップリンクさんが日本一小さな映画館を標榜していましたが、うちが超えました！」

## チケットまでも事務所で手づくり

狭い階段を上って、2階にある事務所へもお邪魔しました。事務所内の様子からも運営に伴う作業の煩雑さが想像できます。

「数えてみたら、昨年1年間だけで2館で500本をかけていました。自分でもビックリしています」と山崎さん。小さな文字が裏表びっしり埋め尽くされた上映スケジュール表は2ヶ月に1回の発行で毎回1万5000枚。上映作品の解説や特集でピックアップした監督や俳優さんの紹介文などは、熱が入ってつい長くなり、そのぶん文字のフォントが小さくなっていくとか。「昨秋の山田五十鈴追悼特集では、略歴だけでも膨大に。山田さんの人生が凄すぎて、とても削られへん！」

チケットも、カラーコピーできない特殊な紙を使って事務所で手作りしているそう。8名のアルバイトスタッフは、映写、受付、チラシ発送、HPなどを分担。

上映作品を選ぶのは、代表の景山氏と山崎さん。「好き嫌いだけではできない仕事。個人的な好みで上映作品は決めず、どんな作品でも公開を待っているお客さんがいるのでは？」という視点で選びます。メジャーもインディペンデントも問わず、いろんな作品を幅広くピックアップしているつもり。」

九条という立地ゆえの苦労、配給会社との交渉につぐ交渉など、にこやかに、さらりと話してくださる山崎さんですが、お話からはミニシアターを維持していくことの大変さがひしひしと伝わってきます。



事務所で



事務所で



事務所で



16mmフィルムが入った箱を  
持ち上げて

## 憧れの聖域、映写室にも特別に！

普段は絶対に入れない聖域・映写室にも入れていただきました。真っ暗な室内に16mmフィルム用映写機と35mmフィルム用映写機、デジタル用プロジェクターの3台が並んでいます。奥の2台のフィルム用映写機は、もちろんシネコンにはない今や貴重な機材。参加者の中には感激と感動のあまり涙ぐむ人も！

「ここではフィルムやって、デジタルもやって、映写技師はもうたいへん。フィルムの場合は劣化していないか事前にチェックが欠かせないので、そのぶん時間もかかります。」



こちらは35mmフィルム



狭い映写室の見学は“おしくら  
まんじゅう”状態

上映が終了し、お客さんが出払ったところでシアター内へ移動。「ここは天井が高いのが特徴で、前列の人が立ち上がってもスクリーンが見えるようになっています」。松本雄吉さん主宰の劇団「維新派」による内装も怪しくゴージャス。「天井を水面に見立て、針金で気泡が浮いているさまを表しています」。もともとは86あった座席を、シネコンの快適な座席に負けないようにと10年ほど前に69席に減らし、ゆったりとした座り心地に。山崎さんのベスト席を教えてください。ある座席をめぐるちょっと怖〜いお話を伺ったり。

古い日本映画もよくかける数少ない映画館だけに、お年寄りのお客さんも少なくありません。「80代、90代の高齢の方も杖をついていらして、＜ワシ、この映画を○オのときに見たんや＞なんて嬉しそうに話してください。そんなお客さんがある日を境にずっと姿を見せなくなると、亡くなられたのかな？と思うんです。でも、あんなに映画が好きだったんだから、＜亡くなっても観に来てね！＞って思う」。映画好きが映画好きを思う、その気持ちのあまりの深さに、ジーンときてしまいます。



墨絵のようなペイントも新し  
なシアター内



天井からは水泡をかたどった  
針金のオブジェが

## 座って呑める「立ち呑み ふくり」

シネ・ヌーヴォの舞台裏をたっぷり堪能したあとは、山崎さんお気に入りの飲み屋さんへ。道中、山崎さんは度々立ち止まり、よそ者にはなかなか見つけにくい、おいしいお店やお薦めのお店を教えてください。



九条の路地裏のお店を教えて  
もらいながら



山崎さんお気に入りの「立ち  
呑み ふくり」へ



乾杯後、おすすめの一品をバンバン注文してくれる山崎さん。身にまとう雰囲気からは想像しにくい、意外に豪快な一面も。実は、呑んで周囲に絡み、やや凶暴になることもしばしばとか。「それもこれもヌーヴォの上映作品を熱心に宣伝するあまり」とご本人。時にその思いが伝わらなくてもどかしくなり、ついつい軽く拳が出てしまうそう！？ 「つい先日も朝起きたら右手の拳が腫れ上がっていて…私はよく憶えていないんですけど。」ひとえに映画を愛すればこそこのヒートアップ。九条界限でお飲みの皆さま、どうかご用心&お許しください。



参加者からは、次々と質問が投げかけられます。

Q：「上映作品の情報はどのように入手するんですか？」

A：「新しい作品は東京の試写状や映画館の情報からセレクトすることが多いかな」。「生誕100年おめでとう特集や追悼特集は今後ずっと力を入れて続けていきたい」とも。

Q：「特に好きな映画監督は？」

A：「アンドレイ・タルコフスキー。小津安二郎。木下恵介。」タルコフスキーファンという参加者からは、興奮気味に共感の歓声が上がります。「タルコフスキー作品の構図の美しさは、映画館の大きなスクリーンで見なければ伝わらない」と山崎さん。

子どもの頃からお正月は家族で必ず“寅さん”を見るなど、映画に親しんで育った山崎さん。けれども映画にかかわる仕事をしたいと思ったのは意外に遅く、絵の勉強をしていた20歳の頃だったそう。「小津安二郎の作品で私と同じ名前の主人公が登場する紀子三部作（『晩春』『麦秋』『東京物語』）を見て、初めて“絵画的な美しさ”を感じたのがきっかけ」とか。「ストーリーに惹かれる作品もちろんあるけれど、私はどちらかというと、構図や映像が美しい作品に惹かれることが多いかもしれません。」

## 心地よい映画談義は尽きることなく



「ウォン・カーワイ監督の『ブエノスアイレス』は大好きな映画。シネ・ヌーヴォでの上映回数もとても多い作品」と山崎さんが言えば、「観逃した」「まだ観ていない」「また観たい」と口々に反応する参加者。それを受けて山崎さんから「日本での上映権は去年で切れたけど、チャンスがあるなら、何度でも上映したい」宣言が飛び出します。

昨年の山崎さんのベスト1は、ハンガリーの監督、タル・ペーラの『ニーチェの馬』だという話を糸口に、約8時間に及ぶモノクロ大作『サタンタンゴ』や、2時間以上の作品をわずか27カットで撮影している『ヴェルクマイスター・ハーモニー』などタル・ペーラ作品の話題でしばらく盛り上がります。「国によっては制約等、厳しい条件でつくられた映画は、逆に突き抜けたおもしろさがある」と山崎さん。

富田克也監督の『サウダーヂ』、フィリップ・ガレル監督の『灼熱の肌』、イランのバフマン・ゴバディ、フランスのジャン・リュック・ゴダールetc. 山崎さんだけでなく参加者からも世界各国の監督や作品の話が出るわ、出るわ。「山形国際ドキュメンタリー映画祭に行くと映画祭の醍醐味が味わえる」、「最近はずなくなったけれど、オールナイト上映には一晩同じ屋根の下で時間を共有する良さがある」「デジタルとフィルムの空気感、興行きの違い…」などなど、映画をめぐる話は深く広く尽きることなく、心地いいおしゃべりの時間はどんどんと過ぎていき…予定の時間を2時間近く超え、お店の閉店時間もすでに過ぎ、参加者の終電の時間が迫ってきて、名残り惜しみつつようやくお開きに。

「映画っていいなあ」としみじみ感じ、「もっとたくさん映画が観たいな」と心から思えた一夜でした。



## ツアー概要

**このページの情報は、終了した事業に関するものです。**

大阪西区、九条は昔ながらの下町。そこにあるのが、大阪ミニシアターの草分け「シネ・ヌーヴォ」。  
1997年開館当初から、国内外から選りすぐりの映画が上映され、現在も多くの映画ファンに加えて、映画監督などの関係者のファンも多いという。席数69という、まさに息遣いが感じられる劇場。

今回の創造人は、3代目女性支配人の山崎紀子さん。しなやかさと強さをあわせ持つ女性。  
映画などに関わる父親の影響で、こどもの頃から映画を見続けていたという映画一家に育ち、現在は3代目女性支配人として、作品選び、劇場管理、広報などを一手に担う。ツアーでは映写室の見学など、普段では触れない舞台裏を体験。

その後、映画関係者も訪れるという山崎さん行きつけの穴場の酒場で飲みながら語らいを…。小さなミニシアターだからこそ、表現できるものがあるという。

下町だからこそ、感じられる、映画のワンシーンのような山崎さんの日常に触れてみませんか？

|      |                                                                                                                                                                                                                  |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 内容   | 下町アートシアター“シネ・ヌーヴォ”～舞台裏見学と九条下町ぶらり飲み～                                                                                                                                                                              |
| 日時   | 2013年2月25 日（月）<br>19:30集合（地下鉄九条駅6番出口地上）<br>21:30頃解散（九条駅周辺）                                                                                                                                                       |
| 定員   | 5名（20歳以上の男女）                                                                                                                                                                                                     |
| 料金   | 3,000円＋飲食費実費（3,000円程度）                                                                                                                                                                                           |
| 注意事項 | 1. 飲酒をとまなうツアーのため、お車でのお越しはお控えくださいませ。<br>2. 参加費は事前に銀行振込、飲食費は各店舗で実費精算となります。<br>3. 雨天決行<br>4. 申し込みは定員になり次第締切らせていただきます。<br>5. 内容は変更する場合がございます。<br><br>振込口座等の詳細は、お申し込みいただいた際にお知らせいたします。<br>その他、ご不明な点はセンターまでお問い合わせください。 |
| 申込方法 | 定員に達したため、締め切りました                                                                                                                                                                                                 |

### ▼ 山崎 紀子（やまさき のりこ）

1977年 大阪生まれ。  
大阪美術専門学校にて3年間、油彩画を学ぶ。在学中に今はなき梅田花月の夜だけ映画館「シネマワイズ」にてアルバイト。ミニシアターをはしごすることを覚える。  
2001年 シネ・ヌーヴォに入社。  
2008年 支配人に就任。数々の特集上映企画に携わる。  
弟は映画監督の山崎樹一郎（『紅葉』『ひかりのおと』）。

[シネ・ヌーヴォHP](#)

[過去の肌感についてはこちら](#)

